

血液透析患者に併発した石灰乳胆汁の一例

大江隆之¹⁾, 米田文男¹⁾, 矢川裕一²⁾

医療法人社団成和会西新井病院附属成和腎クリニック¹⁾, 同西新井病院²⁾

諸言

われわれは石灰乳胆汁という比較的まれな疾患を維持透析患者に併発した症例を経験したため報告する。

症例

40 歳代女性。原疾患：閉塞性尿路障害。尿量減少・全身の浮腫で西新井病院受診，原因不明の尿路閉塞による腎後性腎不全と診断を受け，バルーン留置開始するも徐々に腎機能増悪，その後当施設での維持透析に移行。既往歴：気管支喘息。糖尿病（－）。透析歴：3 年。現病歴：スクリーニングの腹部エコーで胆嚢内に無症候性の石灰化病変を認めた。自覚症状はなし。単純 CT では図 1 の矢印の如く胆嚢内に不整形，鏡面像を呈する石灰化様陰影を認めた。西新井病院消化器外科受診，DIC-CT では石灰化病変のためか胆嚢内は造影されず。これらの所見から総合的に判断し，石灰乳胆汁と診断。なお MRCP では肝内結石や総胆管結石は認めず。Labo data：P 6.9 H，補正 Ca 9.5，PTH-intact 104。経口活性型ビタミン D，炭酸カルシウム，炭酸ランタン，塩酸セベラマーの併用で，P は管理目標値を上回るものの補正 Ca・PTH-intact は管理目標値内。肝・胆道系に異常なし。貧血あるも上部内視鏡では表層性胃炎のみ，便潜血は二回とも陰性。腫瘍マーカーの上昇は認めず。その他特記すべきことなし。経過：入院し腹腔鏡下胆嚢摘出術を施行。胆嚢は巨大で，皮切部から摘出するには胆汁を吸引する必要があるが生じたが，それを試みるも粘調度が高く吸引できず，皮切を広げてから胆嚢を摘出した。術後大過なく退院した。

考察

石灰乳胆汁は胆嚢内に炭酸カルシウムを主成分とする粘調度の高い物質もしくはチョコレート様の物質の貯留をきたす疾患で，エコー・腹部レントゲンや CT などで石灰化様陰影を示すことで知られている。石灰乳状の胆汁量が多いときは胆嚢の形に一致して石灰化像を呈するが，少ない場合は本症例の如く「重力のため胆嚢内に石灰乳が沈み」不整形，鏡面像を呈する石灰化様陰影を呈するとされている。疫学的には比較的まれで，30 歳代から 60 歳代に多く，圧倒的に女性に多いとされており男女比は 1:2.4 との報告もある。臨床症状は胆嚢内結石と同様に心窩部痛・右季肋部痛・黄疸などが多いが，1 割程度が無症候性で人間ドッグなどや胃の集団検診でも偶然発見されるとされている。成因は諸説あり，胆管閉塞による胆汁うっ滞，胆嚢の慢性炎症，胆嚢内のアルカリ性変化などがいわれている一方で，カルシウム代謝異常もあげられている³⁾が，本症例では経口活性型ビタミン D，炭酸カルシウム，炭酸ランタン，塩酸セベラマーの併用で，補正 Ca は管理目標値内であった。

PTH-intact も管理目標値内であったが、P は軽度高値で、石灰乳胆汁との因果関係は不明である。維持透析患者の胆石について、保有率は高いが胆石形成リスクは低いとの報告はある²⁾。また透析患者に石灰乳胆汁を併発した例は調べた限りでは皆無であったが、潜在的には他にも生じている可能性がある。今後の症例の蓄積が待たれる。

結語

血液透析患者に併発した石灰乳胆汁の一例を報告した。石灰乳胆汁の成因にカルシウム代謝異常が指摘されているが、本症例では補正カルシウムは管理目標値内であった。

文献

- 1)高崎元宏他. 高知県立中央病院医学雑誌, 17 (1) : 37-42, 1990.
- 2)風間順一郎他. 日本透析医学会雑誌, 41(Suppl.1) : 516, 2008.

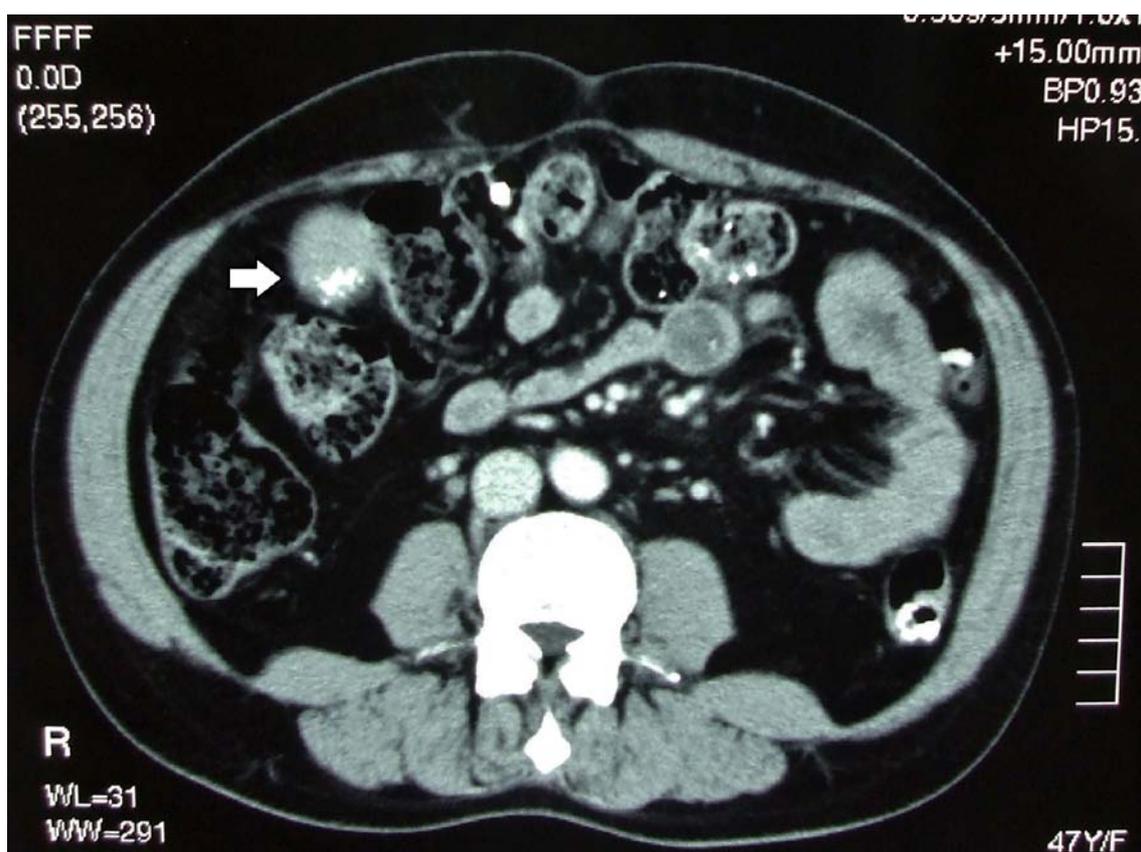


図1 単純 CT